二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ヴァンパイアスレイブ

陵辱の十字架

小説 筑摩十幸
挿絵 助三郎

第一話　光と闇と　006
第二話　淫獄の虜囚　051
第三話　灼熱の陵辱刑　094
第四話　魔少女蹂躙――すべて奪われて　163
第五話　奴隷デビュー・恥辱のステージ　225

登場人物紹介

Characters

絹川歌織（きぬかわ かおり）

母親が妊娠中に吸血鬼に襲われたため、ヴァンパイアの力を身につけた半魔の少女。普段はクラス委員長として同級生たちから慕われている。

ヘレン・鹿島（かしま）

教会の退魔師として魔物と戦いつつ、歌織を見守ってきた心優しいシスター。

レラージュ

ボンデージスーツをまとう淫らな女悪魔。人間を餌食にしている。

東郷（とうごう）

歌織を監視するために教会に雇われた、フリーの魔物ハンター。

『第二話　淫獄の虜囚』より

甲高い悲鳴を上げて背筋が反り返る。ごりごりと太くて硬い杭で媚肉を抉られ拓かれるたびに、激痛が身体の中心を走り抜ける。そして杭から注ぎ込まれる青白い聖気が、媚粘膜や幼い子宮を容赦なく焙った。

「その痛み、苦しみをよく覚えておけ。それがこれからお前を支配する。身も心もすべてな」

「う……ぐ……あぁぁぁ……」

その声が聞こえていないのか、歌織は苦しげに喘ぐばかりだ。単純に比較はできないだろうが、通常の破瓜の数倍の痛みを受けねばならなかったのだから無理もないだろう。

「お前が俺に逆らったり、言うことを聞かなかったらこの苦しみを味わうことになる」

突き立てた杭を子宮に埋め込むようにグリグリ捻った。擦られる子宮口で聖気の火花が散り、少女の絶叫が迸る。あまりの苦痛に意識がスッと遠のいた。

しかしそこで気絶という逃げ道を与えるほど、東郷は甘くない。失神寸前で手を止め、生殺しの地獄に歌織を抑留する。

ズボッと杭を引き抜き、乙女の血に濡れた先端を見てニヤリと嗤う。

「もう一つ覚えてもらうモノがある」

懐から取り出した薬瓶から白いクリームをすくい取ってクレヴァスに塗り始めた。

「く……う……」

ヒリついていた粘膜に塗られた、ひんやりと冷たいクリームが痛みを和らげる。だが次の瞬間、それは猛烈な熱と掻痒感となって媚粘膜に爪を立ててきた。

「ああ……っ！」

異様な刺激にクンと顎が上がる。ムズムズと胎内をくすぐられる感覚に混じって、チクチクと粘膜を甘噛みされるような感覚が襲ってくる。

「な、なにをしているのよ！　変なことしないでっ！」

まだ性体験を持たない少女は、ひたすら菌を食いし

ばってその新たな責めに耐えるのだが、その間も男の指が何度も往復しては、秘奥の底までたっぷりとクリームを塗り込んでいく。

「こいつは聖水入りの催淫媚薬だ。吸血鬼のお前にはたまらないだろうな」

それを聞いた歌織の顔が青ざめる。さすがはエクソシストだけあって、東郷は吸血鬼の弱点を知り尽くしている。ただ犯されるだけなら絶対屈しない自信があるが、吸血鬼としての弱点を同時に責められると、抵抗する力がガクンと落ちるのがわかった。

歌織の反応を見ながらニヤリと嗤い、杭にも塗りつけていく。

「さて、これからお前が味わうのは快楽だ」

「うう……快……楽……ですって……こんなの苦しいだけよっ！」

長時間の逆さ吊りに苦悶しながら、歌織が呻いた。普通の人間ならとっくに失神しているだろう。

「そいつはもうすぐわかるさ」

血と混ざり合い、ピンク色に光る聖淫具が再びクレヴァスに沈み始める。

「うぅ……ああ……っ！」

痛みに耐えようと力んだところに、予想外の感覚が芽生える。あれほど激痛をもたらした聖杭が、妖しい痺れとともにズルリと滑るように膣内に埋まってきたのだ。

（な……なに……これ……あそこが熱く……）

自分の身体になにが起きようとしているのか、処女を失ったばかりの歌織にはわからない。聖水媚薬の効果なのか、いままで誰も触れたことのない秘肉が、吸血鬼の少女にとって禁忌とも言える聖なる白木の杭に擦られてジーンと疼き始める。そのおぞましい感触から逃れようと、全身を揺するのだが、一方で膣肉は本人の意思を無視して、キュウッと杭を締めつけてしまう。すると白木の棒と媚肉の間に、ジュワッと透明の

蜜が溢れた。
「感じてきたな」
少女の変化を、杭を操る指先に感じ取って東郷は杭打ちを加速させる。
ズブッ！　ジュブッ！　ズブッ！　ジュブブゥッ！
杵で餅をつくように激しく子宮を連打しながら、同時に少しずつ媚薬を杭に塗り足していく。
「か、感じてなんか……うう……もう…あうっ……やめ……やめなさいよッ！」
歌織が僅かに上擦った悲鳴を上げる。溶け込んだクリームで、聖域全体が油を塗ったようにヌメヌメ輝き出し、清楚な少女の花びらをセクシーに飾り立てる。
そしてその淫靡な外観に相応しい変化が少女の胎内にも起こり始めていた。
媚薬により出血は止まり、代わって搾り出された愛液で、聖杭はスムーズに抽送を繰り返す。
ズーンズーンとボーリング機で掘削されるような重い振動が、赤く爛れた波紋となって身体中の細胞をざわつかせ、呼吸が息苦しく乱れてくる。体温の上昇に伴って、制服の下の肌がじっとり汗ばみ、甘酸っぱい少女の匂いがほのかに漂い始めた。
（ああ……ど……どうなってるの……私……変だ）
逆さ吊りと杭打ちで意識が朦朧としていく一方、なにかが胸の奥で、確実に昂ぶっていく。ハアッハアッと可愛い舌を覗かせて喘ぎ続ける唇の端から、涎の筋がすうっと滴った。
「フフン、処女喪失したばかりだってのに、いやらしい奴だな」
嘲笑いながら杭でグリグリと子宮の底を抉り、腰を抱くように前に伸ばした片手がクリトリスを捉える。媚薬によって強制的に勃起させられた牝芯は、ちょっと指を添えただけでクルッと包皮が剥け返った。明るく元気な少女に不似合いな、平均より少し大きめの快楽器官がクレヴァスの狭間にぴょこんと顔を出して宝

石のように輝く。そこにも聖水媚薬をたっぷり塗り込み、指で摘んでしごくように責めまくった。

「あっ……あっ……ふぁっ……うあぁンっ！」

ビリリッと電流を流されたような目眩く刺激が下腹に弾けた。聖域を灼く炎に油を注がれ、こらえきれず甘い声を漏らした歌織が、ハッとして唇を噛む。

（こ、こんな男に……屈するなんて……絶対イヤッ）

おぞましい官能を抑え込もうとして、全身を力ませると膣肉が聖杭を喰い締めて、却ってその形状をハッキリと感じ取ってしまう。丸みを帯びて膨らんだ先端を持つ疑似男根の形を胎内に感じると、子宮がキュンと疼いて歌織を動転させた。

（そんな……いや……いやなのに……）

卑劣な罠で捕らえられ、姉と慕うヘレンを汚した男に拷問のような責め苦を受けているというのに、若い肉体はどうしようもなく反応してしまう。

自慰経験もない歌織は、自分の身体にこれほどの性感が秘められていたことに驚かされた。荒ぶる官能をどう処理していいのかわからず、男の思うままに翻弄され、一歩一歩高みへと追い上げられていく。

「フフフ、歌織お嬢様はクリトリス責めがお気に召したかな。ドロドロに濡れてきたぜ」

噬いながら聖杭を抉るように大きく動かした。

ジュボッ！　グジュウウゥッッ!!

一際大きな水音を響かせて、捩れた柔襞からはしたない淫蜜の飛沫が跳ぶ。

「いや、いやぁぁぁっっ！」

媚薬と聖気に灼かれる粘膜が燃えるように熱くなった。そこから生まれた熱波が津波のように子宮を洗って、理性の堤防を突き崩していく。それに加えて肉芽から垂直に降り注ぐ鋭い快楽の稲妻が、身体を真っ二つに裂くように走り抜けた。

二つの快感が頭頂に届くたびに、頭に上った血液が赤く沸騰する媚薬のようになり、そこに漬け込まれた

脳はもう、まともに機能してくれない。狂った命令に応えるように腰がビクビク震え出し、膣が聖杭をしゃぶるように絡みつく。
「なかなか感度はいいみたいだな。締めつけもいい。鍛えればすぐにヘレンに負けない名器になるぜ」
「う……ううンっ」
ヘレンもまたひどい目に遭っているのだとほのめかされ、怒りとともに一瞬だけ理性が蘇る。だが、身体のほうはまったく言うことを聞かないまま暴走し、背筋や吊られた太腿に、淫らな痙攣が何度も走った。
「もう気をやるのか。杭を打たれて悦ぶマゾ吸血鬼なんてお前くらいだろうよ」
「ちがっ……ううううっ!!」
抗議を嘲笑うように、木の芽を弄んでいた指先から聖気が流し込まれた。
「きゃああぁぁぁぁぁぁぁぁっっ!!」
敏感な性感を秘めた神経を灼く強烈な衝撃に、顔が床と水平になるほど背筋がグンッと反る。
さらにトドメとばかり、子宮口に食い込んだ聖杭から大量の聖気が歌織の胎内に注ぎ込まれた。
「きひぃっ！　おなかっ！　溶けちゃうぅっっ！」
少女と吸血鬼の急所を複合的に責め抜く拷問が、相乗効果で歌織を狂わせ、魔悦に呑み込んだ。子宮に生じた官能の炎が、身体の中心を溶かしながら魂までも焼き尽くす。
「ンあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ!!」
絶頂の悲鳴を振り撒いて、全身を痙攣させる。恍惚の余波で爪先がビクンビクンッと震え、後ろ手の拳がきつく結ばれる。折らんばかりに喰い締めた白杭の狭間からドクッと白濁した花蜜が溢れ出た。
「う……あぁ……」
やがて逆さ吊りの身体が弛緩しダラリと伸びきった。釣り上げられた人魚のような無惨な姿だった。

『第三話　灼熱の陵辱刑』より　その１

恥辱の学級委員は羞恥のあまり目眩に襲われた。
湯上がりのようにピンクに染まったお椀型の乳房がクリームで妖しく光りながら、好色そうな男子生徒にモミモミと搾り出すように揉まれている。その頂点を僅かに隠す極小の水着の下で、いつの間にか尖りきったニップルが破廉恥にも自己主張している。
ボトムはさらに透明度を増していて、恥毛やスリットを隠す機能はもはやない。ほとんどすべてが級友たちにさらけ出されているのだ。
そしてカモシカのような脚線美はクリームと変質的な愛撫に磨かれて、爪先までぬめるような輝きに包まれている。
「み、みんな……お願い……見ないで……」
惨めさと恥ずかしさに耐えかねて、吸血少女はモジモジと太腿を摺り合わせて身悶えた。すっかりとろけてしまった自分の状態がわかるだけに、恥ずかしさで死んでしまいそうだ。
「見るなって言われてもねえ。甲斐や山本にだけサービスってのはずるいぜ」
「本当は見せたがっているクセに。ちょっと可愛いからって、調子に乗っているのよ」
女生徒たちが嫌味たっぷりに囁きあうのが聞こえてきて、歌織は耳を塞ぎたい心境だ。彼らも甲斐や山本同様に淫気を増大させられているのだろうが、歌織にそれに気づく余裕はない。神経を剥き出しのようにされた全身の肌という肌が突き刺さるクラスメイトの視線を敏感に感じ取り、熱く燃えてくる。それはある意味、陽光以上に辛い責めだった。
惨めさにたまらず顔を横に背ければ、山本の紺色の水着に包まれた股間が目に入った。
（ああっ！）
そこはものの見事に勃起しており、少年が欲情しているのは間違いなかった。ハッとして反対側を見れば甲斐も同様の有様だった。そればかりではない。周囲

で自分を見つめる男子生徒は皆、黒いトランクス型の水着の前を膨らませているのだ。

カアッと顔が火を噴くほど赤くなるのがわかる。自分の肉体がクラスメイトを欲情させているという事実がたまらなく恥ずかしい。

そんな反応を見てしまったせいだろうか。我知らず締めつけた柔襞が、埋め込まれた聖杭を一際鋭敏に感じ取る。

朦朧とした脳裏にフラッシュバックするのは、逆さ吊りで処女を破られたうえに追い込まれた、屈辱的な初めての絶頂体験だ。

三日間、耐えに耐えた淫気が目覚め、少女の胎内でざわめき始める。肉体は精神を裏切って、あの狂おしいまでの爛れた被虐絶頂を求めているのか。淫虫が暴れ回る膀胱が甘く痺れ、杭に貫かれた媚肉がジクジクと蜜を溢れさせてしまう。

（だ、ダメよ……しっかりするのよ、歌織！）

混乱の中、唇を噛み締めなんとか理性の糸を繋ぎ止める。淫らな地熱の上昇に伴って、排尿欲求も高まっていた。気力と体力が失われてしまえば、級友の前でとんでもない恥を晒すことになる。それだけは絶対に避けなければならない。

ふっと、時計台に目をやれば授業の残り時間は、あと十分ほどだ。

（なんとか、このまま……）

そう歌織が思ったとき、レラージュが顔を覗き込んできた。

「このまま逃げきれると思っているのかい？　あまいねぇ。これからが本番だよ」

そっと耳元で呟いたあと、レラージュは立ち上がり生徒たちに向き直った。

「甲斐君と山本君だけじゃ、足りないみたいだから、みんなも手伝って頂戴」

言うが早いか、残りの聖水媚薬を吸血少女の身体に

振り撒く。それを合図に、一斉に生徒たちの手が飢えたピラニアの如く群がってきた。
「いやっ！　やめて、やめてぇっ！　あひいぃっっ！」
悲鳴を無視して、二十以上の手が歌織の雪肌を激しくまさぐる。
「歌織の肌、スベスベして気持ちいい……」
「うへへ、俺にも触らせろよ」
「委員長の身体ってすごく温かくて、柔らけぇ」
夢中になって歌織の身体を愛撫するクラスメイトたち。その目は、どこか異常な気配を滲ませていた。おそらく攻撃的で直情的な性向を肥大させられているのだろう。ほとんど強姦されるように全身を責められ、歌織は混乱する。
乳房に何本もの指が食い込んでムニュムニュと揉みまくられる。お臍がほじくられ、色っぽい太腿も触り放題だ。
「みんな、やめて、お願いっ！」
必死の懇願にも、級友たちは反応すらしない。それどころかますます勢いを増して、全身を愛撫してくる。
なんとか逃げ出そうとするのだが、手足を押さえつけられては身動きできなかった。闇の力を使えないいま、歌織は一人の非力な女子学生でしかないのだ。
動きを封じたところで、女生徒の指が十字首輪を嵌められた首筋をねちっこく這い始める。
「この首輪も、なんかエッチだよね」
女の子の声にもどこかサディスティックな響きがあった。首輪という被虐的なアクセサリーを身につけた少女が半裸で目の前に横たわっていれば、それも当然と言えるだろう。
「絹川さんったら、教会には来ないのに十字の飾りなんて変よね」
なじるように言いながら、十字を刻まれた銀のプレートをグリグリ押し、喉との隙間に媚薬クリームを塗り込んでくる。

「そ、それは……うく……」
　ビリビリと聖気が染み込んできて、歌織は息が詰まりそうになった。
「ま、個人のファッションをとやかく言う気はないけどね」
　喉元をヌルヌルにしたあと、しなやかな女子の指は鋭角な顎のラインに沿ってくすぐるように移動し、敏感なうなじや耳の裏にまで丁寧にクリームを塗り込んでくる。荒々しい男子の指とは違う同性の優しく丁寧な指遣いは、毛穴の一つ一つを穿り返すようにねちっこい。もともと敏感な歌織は、それだけでもゾクゾクと痺れるような感覚に襲われて、産毛を逆立ててしまう。
「でも奥手な歌織が、こんな格好を見られて感じるなんて、なんか裏切られた気分よね」
「きっと欲求不満だったのよ。綺麗な身体を本当は見せつけたくて、ウズウズしてたんじゃない？」
「やっぱり露出症なのよ。乳首だって、あんなに勃ってる。見ているほうが恥ずかしいわ」
　嫉妬の感情も増幅されたのか、女生徒の容赦ない言葉が歌織の胸にナイフのように突き刺さってくる。
「違う……私は……はあ、はあ……ああン……もう、やめて……」
　切なげに桜色の唇をほころばせ、白い歯を覗かせる歌織。生徒たちに明確な自覚はなくとも、それは歌織にとっては甘美な拷問に他ならない。弱りきった肉体に容赦なく染み込む媚薬成分は、血流に乗って少女の全身に行き渡ってしまう。瞳もどこかトロンとなっていつもの輝きは失われていた。
　煮え立つ鍋に放り込まれ、とろ火で骨の髄まで煮込まれるような感覚。事実、吸血少女の身体の奥底、相当深いところまでが聖気に犯されていた。闇の力も、もうほとんど感じられない。身も心もボロボロだったが、高まるばかりの尿意が気を失うことも許してくれ

なかった。
「ここは私がしてあげるわね」
妖美な眼差しのシスターが足掻く吸血少女の聖域に指先を伸ばす。クチュッと音がして、ビキニショーツに侵入した冷たい指が、秘裂の奥の尿道口に正確に食い込んできた。
「ひあぁぁぁっ！　そこ、だめぇぇぇっっ!!」
指に魔力を乗せているのか、凄まじい快感とともに必死の堤防が大きく揺さぶられる。
その一瞬の隙をついて、一滴の尿が細い尿道を一気に駆け下る。
（いやっ！　も、漏れちゃうぅぅっっ！）
失禁してしまうかと思われたとき、新たな衝撃が歌織を襲った。
（!!）
かつて感じたことのない快感が尿道で爆発して、意識までが揺らいでしまう。
ほんの一滴、朝露ほどの雫が尿路を抜けただけなのに、これまで受けてきた色責めが児戯にも思えるほどの快感を感じてしまったのだ。
「あ……ひ……っ」
恐ろしい改造が完了してしまったことに気づかされる。淫虫が伸ばした魔力回路はGスポットとクリトリスに接続され、小さな孔はその二カ所の快楽を同時に味わえる究極の快楽器官へと姿を変えていたのだ。
奔流は必死に堰き止めたものの、いままで以上の暴虐に晒され、歌織はビクビクと全身を痙攣させた。
「うふふ、すごいでしょう？　お漏らししちゃったらとんでもないことになるわよ」
必死の歌織を嘲笑うように、シスターは尿口を執拗にマッサージし、小さな魔力を何度も送り込んでくる。
聖女にあるまじき暴挙にも、淫情に取り憑かれた級友たちは関心を示さない。むしろそれにシンクロするように手の動きを変えていく。バラバラだった各自の

手の動きが統制されていき、首筋、腋の下、脇腹、足の裏を集中的にくすぐり始めた。

「いや――――っ!!　っっはあぁ!　く、くすぐらないでぇぇっ!!」

歌織は黒髪を振り乱して絶叫する。前門に爆弾を埋め込まれた歌織にとって、それは致命的な刺激だった。

「ヒィィィッ!　やめ……アッハァァッ!　いやいやいやあっ!!　はひぃっ!　お願い、ううっ!　やめてぇっ!!　アフフゥゥッッ!」

バタンバタンと陸に揚がった魚のように身体を跳ねさせる。乳房がブルブル揺れて汗が飛び散る。水着がずれ、可憐な乳首が露わになってしまっても気にする余裕はまったくなかった。

「やめてぇっ!!　アハウンッ!　こ、これ以上くすぐられるのはイヤァ――――ッッ!!」

くすぐったさで緩みそうになる尿道を締めつければ、それだけで常識を超えた尿道快感が吸血少女を狂わせ、悲鳴を搾り取る。

異常なまでの快楽器官と化した尿道。もし失禁してしまって、そこを熱い迸りが駆け抜ければ、自分は確実に狂う。級友の前で取り返しのつかない恥を晒すことになる。それだけは死んでもイヤだ。

しかし少女の願いなど聞き入れられるはずもなく、拷問人と化したクラスメイトたちの指は、異常なまでの執拗さで蠢き続ける。

首輪の下の白い喉を下から上に擦り上げるようにくすぐられた。左右の腋の下にも複数の指が入り込み、柔らかな肌を引っ掻いていく。脇腹は肋(あばら)を連続で擦るように、鋭く立てた指先が高速で上下動を繰り返した。そのたびにパパッと閃く火花が身体の両舷を稲妻のように走り抜けた。

足の裏にも容赦ない。最も敏感と思われる土踏まずの辺りに、爪を立てるような荒々しさで非情な責めが施される。耐え難い苦しみを表すように、小さな足指

が何度も閉じたり開いたりを繰り返した。
「ひぅっ！」
終わることのない責めに耐えきれず、数滴のオシッコが再び防壁をくぐり抜ける。ヒクヒク痙攣している尿口が、内側からの圧力でプックリと膨らんだ。
その直後、ジワッとビキニの底に広がる不快な生温かさ。
「ンあああああああぁぁぁぁぁぁっっっっ!!」
同時に襲いかかる高圧電流のような尿路快感で少女の自我を包む壁がビキビキとひび割れていく。膀胱の中でオシッコが沸騰したように暴れ回り、クリームと汗に濡れた身体が腰を突き上げて仰け反った。淫らなブリッジが日光を反射して妖しく輝く。
「とどめよ」
レラージュの指先からこれまでで一番強力な魔力が放たれた。紫電を纏った魔力の激流が尿道を遡り、水風船のようにパンパンに膨らんだ膀胱に稲妻のように落雷する。感電したように腰が伸び上がり、がに股に開かれた太腿が痙攣した。
「きゃああああぁぁぁぁぁっっっっっ!! 出ちゃうっ！ ひぃ、ひいぃあああっっ!! 漏れちゃうぅぅっ!!」
次の瞬間、ジャッと液体が弾ける音が少女の股間で爆ぜた。
「きゃあっ！ なに!?」
足元にいた生徒たちが一斉に遠のき、それ以外の生徒は好奇の視線を委員長の股間に注いだ。
パタタタッ！ ジャジャアアッ!!
水着の底を膨らませながら漏れ出た液体が、太腿を濡らしながらコンクリート床に激しく飛び散る。
「オシッコだ、委員長がオシッコ漏らしているよ！」
「うわぁ！ マジかよ。すげぇ勢いじゃん」
少女の甘い尿の匂いが立ちこめ、黄色いヤジが歌織の心臓を抉るように響く。しかし、それを気にする余裕すらも次第に失われていく。

レラージュはさらにシリンダーを押す。ピュッピュッと断続的に送り込んだかと思えばジワジワとゆっくり染み込ませるように注入する。

「うぐぐぐ……っ！」

内臓に直接爪を立てられ掻きむしられるような激感。闇の力を内側からすり潰される虚脱感。そしてそれらのあとには、無防備にされた尿道に薬液が甘噛みの歯を立てる。

「あ……ああ……」

そこに一瞬だけ芽生える妖しげな疼き。しかし次の瞬間には新たな薬液が注入され、再び地獄の苦しみが襲いかかった。

「やめ……もう、いれるなぁぁっっ！」

白い背筋が仰け反り、夕立に打たれたように大量の汗が流れ落ちていく。背中で拘束された手がきつく拳を握り込んだ。悶えるだけでイバラ縄に肌が傷つき、制服に赤い血が滲む。

「ほほほ、苦しみなさい。お前の闇の力を根こそぎ搾り取ってあげるわ」

残忍な嗤いを浮かべて復讐の薬液をグイグイ送り込む。相当量注入されてしまったが薬筒は五〇〇ccはあり、薬液はまだ半分以上残っている。

（あく……く、悔しい……）

かつて一蹴した悪魔に弄ばれ、歌織は牙が折れんばかりに歯噛みする。単純な肉体の責めなら耐えられる。しかし、吸血鬼としての弱点を責め抜かれ、闇の力がジワジワと掻き消されていくと、精神力までも失われてしまう。

だが責めはそれだけにとどまらない。注入直後の苦しみのあと、一瞬だけだった妖しい痺れが、徐々に大きくなっていたのだ。灼かれるような熱さのあとに、薬液に侵された尿道がズクンッと疼くのである。それはすぐに次の注入の苦しみと混ざり合って、繰り返されるたびにより深く、より強く少女の秘められた官能

を抉り出していく。
身体の内から溶かされていくような妖しい感覚が広がると、頭の奥がジーンと痺れてくる。呼吸も乱れ始め、こめかみに脂汗が浮いた。
「効いてきたようだねぇ」
女悪魔の声も虚ろに響いてよく聞き取れない。ドクンドクンと流れ込んでくる波動が心臓の鼓動とシンクロし、身体全体がおぞましい液体に満たされていくような気がしてくる。ハアハアと犬のように喘いでその感覚から逃れようとしても、波動は肉膜一枚隔てた子宮にも伝播し、少女を思いもよらぬ魔界へと誘う。
「ふふふ、ヒクヒク喰い締めてくるよ。まさか聖水で感じているんじゃないだろうねぇ」
レラージュが嘲るように嗤いながらチューブをツンツンと引っ張った。聖水には女体を狂わせる媚薬や麻薬が混入されているのだが、歌織が知る由もない。
「ちがうう……あっ……く、くうぅ……っ……」
ゾクリと背骨を引っかかれるような感触に力が抜けそうになった。尿意も爆発的に膨らんできて、身体がブルブル震え出す。
（どうして……聖水なんかで……）
気持ちを奮い立たせようと、眉根を寄せ盛んに長い睫毛をしばたたかせる歌織。しかし苦しみと疼きが混ざり合い溶けたアスファルトのように子宮に流れ込んでくると、まだ絶頂の余韻が残る身体は再び燻り始めてしまう。それが全身の知覚神経を狂わせるのか、フワフワと浮き上がるような浮遊感に包まれ、床の感覚が消えていく。
「コレで全部だよ」
レラージュが囁き、残りの薬液を一気に押し込んだ。ズーンと臓腑を突き上げる衝撃で意識がぐらっと歪む。その間隙。
「あああぁぁぁぁぁンッッ！」
強固な意志の壁に生じたほころびが、ついに少女の

唇を震わせた。
「なんだか、いやらしい声だねえ？　子猫ちゃん」
指摘されて歌織はハッと唇を噛む。吸血鬼にとっておぞましいハズの聖水注入という拷問を受けて、どうしてこんなに乱れてしまうのか。歌織は自分自身の身体の成り行きが信じられなかった。
「闇の波動がかなり弱くなってきたな」
眼鏡の奥で細い目が猥褻な光を湛える。レラージュに代わって背後のポジションをとった。
「フフフ。苦しかったら泣け。叫べ。許しを請え。そうすれば少しは手加減してやるぜ」
尿道口に深く侵入したチューブをクルクル回転させて、歌織に屈服を迫る。凄まじい快感に襲われ、歌織はたまらず尿道を締めつける。
その拍子に、トロリと熱い滴りが膣口からこぼれた。
（そ、そんな……）
自分の肉体に裏切られ、歌織は愕然としてしまう。
当然、陵辱者もそれを見逃さない。
「ふふふ、聖水責めで濡らすとはな。マゾ吸血鬼として一皮剥けたって感じだぜ」
うそぶいたハンターが、呆然としている少女の細腰をがっしりつかむ。下半身はすでに欲望が具現し、荒々しく反り返っていた。
「やっとその気になったのかい？」
揶揄するようなレラージュの言葉は無視して、東郷は大きく広がった傘の先端をほころび始めた粘膜にあてがった。
（お、犯される！）
熱く硬い肉棒で秘園を探られ、歌織の表情が絶望的に青ざめる。
散々聖杭で嬲られたが、生身の男を受け入れさせられるのは初めてなのだ。すでに処女は破られて純潔も諦めてはいたが、いざ犯されるとなると汚辱感と恐怖が膨らむのは抑えきれなかった。

「ふふふ、悔しいか？　それとも怖いのか？」
少女の動揺を楽しみながら、ジワリと先端を押し進める。
「ううっ」
杭を上回る圧倒的な質量に驚き、さらにそれが体内深く突き入れられるのを感じて、絶望が胸を黒く塗り潰す。
（あぁ、熱い……こ、こんなヤツに……犯されるなんて……）
すでに凶悪なカエシを持つ亀頭部がはまり込んでいる。思い切り掻き広げられた粘膜が初めての男根に驚いて、悲鳴を上げるように軋んでいた。
自分のみならず、ヘレンまでも汚した憎い男。その男のペニスに身体を押し開かれていくのは、舌を噛み切って、死んでしまいたくなるほどの屈辱だった。
「くくく、感じるぜ。お前の憎悪、羞恥、恐怖、怒り」
楽しげに片頬を歪める。その嗤いは傍らの女悪魔をゾッとさせるほど醜悪だ。
「そして闇の力が、ほとんど尽きかけていることもな！」
吼えるように喚くと、そのまま一気呵成に膣肉を貫いた。
ズブズブ、ズブブゥゥゥッッ!!
「うあああンンっ！　……ううっっ！」
重厚な圧力で押し込まれる灼熱の肉棒に、歌織は息を詰まらせる。ペニスは見る見る根元まで埋められて幼い子宮にズンッと食い込んだ。
埋め込まれたモノの巨大さに目を剥くと同時に、苦痛はあったもののその巨根を根元まで呑み込んでしまった自分が恐ろしかった。それは、はしたなくも秘園を濡らしている証拠に他ならない。
今朝までとは明らかに違った反応をしてしまう自分に、歌織は混乱した。昼間の調教で、自分の中のなにかが決定的に変わってしまったのだろうか。じわじわ

と牡の生殖器の熱と太さが膣粘膜に伝わってくるのが悔しくてたまらない。
しかも東郷の肉棒からは強い聖気までもが染み出して、吸血少女を内側から苦しめるのだ。
「うまそうに呑み込みやがって。スケベな奴だな」
東郷は、予想以上の肉の味わいに頬を緩ませた。少しばかり窮屈だが、男根を包み込むようにしっとり絡みつく柔肉は名器の素質を秘めている。
「ヘレンみたいに熟れるのはまだ先だろうが、こういう新鮮な味も悪くないな」
快感に顔をほころばせながらズンズンと腰を打ちつけてくる。そのたびにクチュクチュといやらしい音が聞こえてきて、歌織は耳を塞ぎたい心境だ。
（う……うそ……こんな……）
羞恥の秘孔を聖水漬けにされ、宿敵のエクソシストの肉棒を埋め込まれ、下半身が骨抜きにされたように力が入らなかった。そして膀胱の聖気に焙られた柔襞にピストンと同時に聖気を打ち込まれると、子宮がキュウキュウと収縮を繰り返し、煮崩れてしまいそうなほど熱くなる。
「あっ……あっ……やめ……ンンッ！」
吸血少女にとって、これ以上ないほど悲惨な状態でありながら、抉られる膣襞がどんどん熱くなりジクジクと蜜を湧かせるのを止められない。声も抑えきれず、犯される腰もクネクネと揺れ始める。
歌織の変化を見抜いて、東郷は少女の身体を背後から抱き起こした。胡座の上に乗せて、後背座位でさらに深く刺し貫く。
「はああンっっ！　くるし……いッ」
子宮を突き上げられ、歌織は首輪の喉をクンッと反らした。衝撃が尿意に膨らんだ膀胱にビンビン響く。
拘束は解かれていないので両脚はM字の大開脚だ。その正面にレラージュがポジションをとった。手には空になったシリンダーが握られている。

「いいザマだよ。どんなに嫌がっても、お前の身体はもう快楽の虜なのさ」

剛棒をいっぱいにくわえ込み、淫蜜にドロドロに濡れた媚粘膜を見て、女悪魔は楽しげに嗤う。

キィーッとシリンダーが引かれ、黄金色の液体がガラス筒に吸い出されてきた。

「いやっ！　いやあぁぁぁっ！」

膀胱から直接、恥水を吸引されていく異常な感覚と排泄物を見られる恥ずかしさで、歌織は真っ赤になって黒髪を波打たせた。しかし、淫虫に取り憑かれた膀胱は妖しく疼き始め、チューブに擦られる尿道からも、ツーンツーンと骨まで染みるような鋭い快感が断続的に湧き起こる。異常な感覚がすぐ下の媚肉を狂わせ、東郷のモノをますます強く喰い締めてしまう。

瞬く間に一〇〇ccのオシッコが抜き取られ、シリンダーを熱く満たした。ガラス越しに伝わる吸血少女の温もりに女悪魔は目を細める。

「吸血鬼でも色は同じ。匂いも似たようなもんね」

「うう……っ」

かすかに漏れるアンモニア臭を指摘されて、吸血少女は耳まで赤くして俯いた。いくら強大な闇の力を持っていようとも、年頃の女の子に違いないのだ。恥ずかしいモノは恥ずかしい。

「さあて、今度はどんな声を聞かせてくれるのかしら」

残酷な笑みを浮かべ無慈悲にシリンダーが押される。

「あひいっ！　そ、そこは、もうやめてっ！　あううっ……アソコも……そんなに、突かないでっ!!」

ドクッドクッと吸引されては注入される聖水が、まるで尿道内を犯すペニスのように激しい水流で、歌織の尿道快感を責め立てる。

「聖水責めでますます締まりがよくなるな」

膀胱を圧迫されるせいで、少女の膣内はより狭くなっていた。それをこじ開けるように、男根を打ち込めば、いかにも未開の処女を犯しているというサディス

ティックな悦びを掻き立ててくれる。
衝動のままに東郷は少女の膝裏を抱えるようにして、激しく身体を揺さぶった。はだけた胸元からこぼれ出た乳房が、ぷりんぷりんと踊り揺れた。
ドスンッ！　ズルルッ！　ドシュッ！　ズルリッ！
ペニスが抜け出る寸前まで持ち上げられ、そこから重力加速をつけて、一気に巨根を埋め込まれる。一瞬とは言え、全体重が子宮の底にかかる過酷な体位だ。衝撃で意識までも飛ばされそうになる。
「ああっ……く、くぅぅ……もう、もういやぁぁッ！」
苛烈な責めに、少女の清純も吸血鬼の矜持も粉々に打ち砕かれて、歌織は悶絶した。
「ふふん、ようやく俺のモノに馴染んできたようだな。かなり具合がいいぞ」
これまで、どんなに犯しても控えめな蜜を滲ませる程度だった媚肉が、ぽってり充血して熱さと柔らかさを増し、男根をキュウキュウ締めつけてはあとからあとから牝蜜を湧かせてしまう。
さらに尿道責めの効果か、必死の締めつけが男にこれ以上ない快感を与え、少女自身にも目眩くような虐悦となって跳ね返ってくる。
「う、うそよ……お前なんか……ひあああっ！」
串刺し運動を繰り返され、反論もできず歌織は上気した顔を振りたくった。滝のような汗が額を流れ落ち、ザッと波打つ艶のある黒髪が、男の劣情を刺激する。ヒイヒイと声を搾る喉で、十字の銀プレートが儚げにキラリと輝く。
「そろそろイかせてやるか」
いよいよ半魔の少女を肉棒の前に屈服させる瞬間が近づき、東郷の責めもヒートアップする。念でペニスに肉瘤を形成し、膣洞に隠された快楽スポットをグリグリ擦り上げた。
それに合わせてレラージュも膨れ上がったクリトリスに手を伸ばし、小円を描くような愛撫を送り込んだ。

「あきゃあぁぁぁっ！　いやっ！　はうンンッ！　だ、だめぇぇぇぇっ!!」

痛みすら覚えるほどの快感で、歌織は白目を剥いて絶叫した。陰核とGスポット。女体の二大性感帯はいまや尿道を経由して直結されている。二つの激烈な快楽の津波がぶつかりあって、高々と噴き上がった愉悦の波飛沫が改造済みの膀胱に打ち寄せる。

常識では考えられない部位で感じさせられては、我慢することもできず、あらゆる抵抗は絶望的だった。媚肉は白く濁った本気汁を垂れ流し、ペニスにしっかり絡みついて放そうとしない。チューブをくわえさせられた尿口もヒクヒクと震え出す。激しい痙攣が炎となって何度も背筋を駆け抜けた。

「ほうら、垂れ流しながらイっちまいな」

残酷に嗤ったレラージュが、限界近い尿道快感に震えていた尿口からチューブを引き抜いた。その直後、

プシャアアアアァァァァァァッッッ!!

「ふあっ！　っく…あああ――――――――ッ!!」

銀泉がすごい勢いで迸り、同時に歌織も絶頂に追い込まれていた。止める術もなく、男の膝の上で惨めな排泄を晒してしまう。

「ひッ、ひぃ――ッ！　漏れちゃうぅぅッ！　こ、こんなのいやあぁぁぁっ!!　ンあああぁぁぁぁっ!!」

憎い敵の眼前で恥を晒し、死んでしまいたいほどの羞恥地獄の中で、歌織は何度も失禁絶頂に追い上げられてしまう。

ガクガクと全身を震わせて、腹筋を息ませては汚辱の連続アクメに身も心も焼き尽くされていく。

「オラ、ちゃんとイクって言わないか」

激しくヴァンパイア少女の身体を揺さぶって、子宮をズンズンと突き上げた。

たまらず仰け反った美貌を男の肩に預け、桜色の唇を喘がせては、白い犬歯を煌めかせた。

「ひ……っく……く……イ、イ……クぅ……ッ！」

歌織は恥水のアーチを描きながら、爛れた快楽に何度も身体を痙攣させた。

「どうだ、俺のモノで気をやった感想は？」

勝ち誇ったようにハンターが嗤い、膝の上の歌織を揺さぶった。きつい収縮に耐えて、剛棒はいまだに深々と秘園を抉っている。

「う……うううぅ……っ」

脱力した身体を揺り起こされ、歌織はグラグラと頭を振って呻くばかり。激しすぎる絶頂が、気力を根こそぎなぎ倒していた。頭の中に桃色の霞がかかったようで、思考がまとまらない。

東郷は確かな手応えを感じながら、拘束を解く。一旦勃起を引き抜き、細腰を抱いて立ち上がった。そのまま引きずるようにして少女の身体を移動させれば、目の前にはかつてヘレンが拘束されていた十字架があった。

「二ラウンド目はここでやろうじゃないか。ヴァンパイアの処刑にはぴったりだろう」

残忍な笑みを浮かべ、歌織の喉を荒々しくつかむ。そのまま制服少女の身体を十字架に押しつけた。

「くはっ！」

背後から強烈な聖気を浴びせられ、身体が痺れて動かなくなった。身動きできない吸血少女の腕をレラージュが引き伸ばし、十字架の両端にイバラ縄で縛りつける。

「うぅ……あぁ……」

苦しげに呻いて、背筋を反らせる歌織。

いくつかの弱点を持つ吸血鬼だが、やはり十字架ほど恐ろしいモノはない。増幅された聖なる力は少女の肌を易々と貫通して骨の髄まで染み込む。さらに霊的にも魂の中枢にまで届いて、闇の力を根本から狂わせるのだ。

あっという間に全身に汗が噴き出し、立っているだ

「んんむ……あふン……」
　新たに突き出されたペニスにもう抵抗を見せず舌を伸ばす歌織。聖気に構わず積極的に舌を絡めれば、これまで以上に口腔粘膜に密着する男根から形状や温もりがハッキリと伝わってくる。ますます敏感になった牙にもより激しく男根が押しあてられ鋭い快感が口中に広がった。頬が鮮やかに上気し、汗と精液に濡れた肌が匂い立つようなピンクに染まっていく。
「いいねえ。積極的になってきたじゃん」
「きっと、浄化が進んでいるってことじゃないか？」
　全身を精液で光らせながら、徐々にうっとりしていく表情で口淫奉仕を始めた美少女ヴァンパイアの様子に、男子生徒たちははしゃいだ声を上げた。それに煽られるように級友のペニスがますます激しく奥深く柔肉をこね回す。
「くう、きゅうきゅう締まって……最高だっ」
　ドスッと子宮口に亀頭部が食い込み、副委員長の腰が歌織の白い尻肉にピタリと密着した。
（ああっ！　な、中に…出されちゃう……！　あ、赤ちゃん、できちゃうぅぅッッ!!）
　膣内射精の気配を感じ取った歌織の身体に、戦慄が走った。しかしそれは括約筋を緊張させて、却って男を悦ばせることになってしまう。
「おおっ！　出る、出るぞっ！」
　歌織の動揺を無視して、渾身の白濁をぶちまけた。
　ドプッ！　ドプッ！　ドビュウウッッ！
「はぐぅぅっっっ！」
　胎内を灼く熱泉のような激しい飛沫。そして歌織が恐れた通り、聖気に嬲られ続けた子宮が、注がれた精液を吸い込むように脈動する。身体の奥底の渇きが癒される、本能に直結する快感が紅蓮の炎となって全身を包んだ。
「ひっ……く……ひぐぅぅっっっ！」
　妊娠の恐怖を吹き飛ばし、骨も肉も溶かすような官

能の激流が背筋を駆け上がって脳を攪拌した。後ろ手の拘束をちぎらんばかりに筋肉を突っ張らせ、犯されている喉を絞って絶頂寸前の悲鳴を噴きこぼした。

「俺も、出る……くぅっ！」

唇を犯していた少年も腰を突き出し、早くも欲情粘液を撒き散らす。

「むぐぐぅうっ！」

喉を塞がれるほどの量をぶち込まれ、悶絶する吸血少女。飲みきれず逆流した精液が牙を淫らにコーティングして包み込むと、子宮と牙を短絡させられたように、快感の火花が身体の中心を突き抜ける。

官能の熱波が魔毒に冒された膀胱を押し揉んで、尿意に似た圧力が急激に膨らむ。それをこらえようと尿口を締めつけた瞬間、尿道性感が目覚め、今度は下から上に電撃が走った。

「ふあぁぁっ……そこ……ラめぇッ！」

天井を向くほど反った胸の奥、魂の底で精気を求める闇の魔手がざわめきながら全身に広がっていく。極限まで責められた身体がその欲求に耐えきれるはずもなく、歌織は喉を鳴らして口に残った汚液を飲み下す。

ゴクッ……ゴクッ……ゴクン……ッ。

体内から聞こえてくる淫らな音を、歌織は魔悦に震えながら聞き続ける。それは自らに敗北を刻み込む被虐の旋律であった。光を失った瞳がジワッと淫気に潤む。

「ぷぁ…ロうして……これ……お……おいしい……」

濁った精液の粘糸を引く唇で、歌織は我知らず呟いていた。それは理性がほとんど麻痺して、思わず漏れ出てしまった言葉であったが、それ故、彼女の本心からの言葉だと言えるだろう。

「精液がそんなにうまいのか？　これじゃあ、まるでサキュバスだな」

「もっとザーメン飲ませてやるぜ、マゾ吸血鬼め」

「今度は俺の上に乗れよ」

すぐに入れ替わりの男子のペニスが歌織の唇を犯し、媚肉にも若い獣根が埋め込まれる。今度の二人はいままでの生徒より体格もよく、それに比例して男根も太く長かった。そのせいか聖気も強く感じる。

唇の端が痛くなるほど口を開かされ、蜜壺も圧倒的な質量でギリギリまで拡張され、聖気に灼かれる。その痛みまでもが心地よかった。

（あぁ……喉もあそこも……疼いてる……よぉ）

牙を擦られながら、イラマチオで頭を揺さぶられるたびに、自我の壁がどんどん剥がれ落ちていく。後背座位の体勢で深く繋がったまま、ゼリー状の白濁にまみれた柔襞を極太でグチャグチャと掻き回されると、精液が子宮の奥底にまで染み込んでくる気がした。

「危険日なんだってな？　へへ、俺の子を妊娠してみるか、歌織？」

激しいストロークで揺さぶられ、乳房が汗を飛ばしてブルンブルンと弾み、聖水で無様に膨らまされたお腹がタプタプ波打つ。

「いやらぁッ！　赤ひゃん……いやあぁぁ！　中に出さないレぇ！」

快感でドロドロに溶けていた頭の中に、妊娠の恐怖が蘇り、歌織は淫棒を吐き出して絶叫した。

しかし飲精の欲求は膣口にも伝播しており、精液を欲しがる子宮は本人の意志を無視して、男根を吸いしゃぶる。

「イヤと言いながら、ぎゅうぎゅう締めてくるじゃないかよ。ああ、いいぜ、歌織のマ〇コ。喰いちぎられそうだぜ」

恋人気取りで呼び捨てにしながら、渾身の突き上げで少女を追いつめる。

身体の芯を溶かされていく快感に、意識がとろけてしまうと、唇に再びペニスがぶち込まれた。

（き、気持ちよすぎて……なにも考えられないよぉ）

内外から押し寄せる淫らな聖気に呑まれ、必死に最

後の抵抗をしていた身体からガクッと力が抜けた。
（ああ……か、身体が……もう……止まらない……）
自分がなにをしているのかもわからない様子で、尻を振りペニスに舌を絡ませていく歌織。その身体に何度となく細かい痙攣が走り、反り返った背中で牡汁に濡れた漆黒の翼が震えた。目前に迫った絶頂に向けて暴走する肉体に歯止めが利かない。
「いやらしくケツを振りやがって。そんなに輪姦がいいのかよ」
「望み通りぶっかけてやるぜ、マゾ吸血鬼め」
ビクンビクンと痙攣する黒翼にまたしても大量のザーメンが放たれて、べっとり絡みつく。
重く感じるほど黒翼を精液まみれにされていくうちに、歌織は十字架に磔にされ翼を毟り取られた自分の惨めな姿を、被虐の陶酔とともに思い出していた。その敗残の姿がいまの自分には相応しい気がしてくる。
「吸血鬼のマ〇コって、スケベだな。どんどん濡れてくるし、無茶苦茶締まって吸い込まれそうだ」
下の少年が巨体を揺らして極太ペニスを打ち込むと、ザーメンと混ざった濃厚な白濁愛液が泡立ちながら溢れ出て太腿の内側を伝い下りていく。
「はあぁっ……ああム……もう、ゆるヒてぇ！」
ドスンドスンと強烈に突き上げられるたびに上体が前に押し出され、より深くペニスを喉に受け入れさせられる。恐ろしいほどの巨根が根元までキッチリ唇に沈んで、歌織は食道まで犯されるディープスロートに悶絶した。
「こっちもサービスしてあげるわ」
レラージュの手が、聖水浣腸でぽっこり膨らんだ下腹をぎゅうぎゅうと押し揉んだあと、こぼれた精液を指に乗せてお臍の下、丁度膀胱のあたりに、小さな六芒星を描き込む。
新たな淫呪が発動し、お腹が張り裂けそうな苦痛と同時に、呪力を浴びた膀胱からジーンと身体の芯に響

くような快美感が伝わってくる。
オシッコとは違う熱く滾るなにかが、いつの間にか恥水のタンクいっぱいに溜まっているのだ。
（ふぁぁ……な……なに……？）
異常快感に怯えつつも朦朧とした意識は回復しない。張りつめるような切迫感とそれを我慢するもどかしさ。性感が昂ぶるほどに、荒々しい水流が膀胱の中に渦巻いて、いまにも溢れてしまいそうだ。
だがそれは尿意とは明らかに異なる感覚だった。得体の知れないドロドロの快感が膀胱付近に流れ込んで、歌織は汗に光る身体をぶるぶるっと震わせた。
「いまから潮吹きを体験させてやるよ。ふふふ、いまのお前なら普通の十倍は噴くだろうねえ。さぞかし気持ちいいだろうよ」
（し…お……ふき……って……？）
耳慣れない悪魔の囁きが、何故か逆らい難い誘惑となって心を揺さぶる。その間も上下の口を深々と抉られて、とてもジッとしていられないほどの快感が、小さな少女の身体の中を嵐のように暴れ回った。
「ハア、ハアッ！　そろそろ……出そうだ」
少年たちの昂奮が高まるにつれて往復の速度が上がり、肉棒から発せられる聖気も強まる。
快感と聖気を叩き込まれる唇と子宮が精液を求め、柔らかな粘膜を男根にまとわりつかせた。ジュンッとスポンジを搾るように蜜が湧き出し、唾液がこぼれる。そこに生じる快美な電流が脊椎を何度も駆け上がり、脳でスパークする。
「あっ……あっ……あふンッ！」
息を合わせたリズミカルな振動に呼吸もままならないほど昂ぶらされる。やがてそれは射精の欲求にも似た切なさで少女の恥丘を疼かせた。必死に締めつける尿孔が何度も窄まってはヒクヒクと痙攣してしまう。
（ああ……なにか……きちゃう……きちゃうぅ……）
連動する括約筋がペニスを締め上げ、少年たちを一

気に快楽の頂上へ導いた。
「おおっ！　し、締まるっ！」
「た、たまんねえ！　出るぞ！」
ドビュウウゥゥッッ！　ブシュウゥゥゥッ！　ドプドプドプッ！
「ヒイィッ！　中はいやああぁぁっ！　ンンッ！　ぐむぅぅっっ!!」
唇と媚肉に白濁が噴出する。同時に聖気の剣が子宮と喉に突き刺さった。牙と子宮に生じた二つの快感火花が一つになって爆発し、吸血少女を破滅的な黒い絶頂へ追いやる。
「はひぃぃッ！」
プッシャアアァァァアアァァ!!
たっぷり溜まった少女の精が堰を切って、尿道を鉄砲水の勢いで駆け下った。接合部から白濁した体液が失禁以上の勢いでシャワーのように噴き上がる。
「ひぃぃっ！　きゃひいいいいっっっ!?　な、なにコレ……で、でちゃうっ！　れちゃうぅぅ!!」
精液を撃ち込まれながら、同時に強烈な潮吹き絶頂を味わわされ、意識が瞬時にして粉々に砕け散った。とろけた表情に淫蕩な笑みすら浮かべ、灼熱の快感に焼き尽くされていく。ガクガクと全身が震え出し、少年の腰を挟む足先がキュウッと丸まった。
「んあああああっ！　イクッ！　歌織、イクうぅぅっっ！　とまらなヒいぃぃッ！」
白い顎を反らせて息むたびに、ビュクッ！　ビュクッ！　と途切れながら牝潮が迸る。通常の潮吹きの数倍の量を迸らせて、それでもなお白濁は噴出し続ける。
「すげえな、潮吹いたぞ！」
「すごい勢いだ。本物の鯨みたいだぜ」
嘲笑されながらも勢いは衰えない。絶頂の痙攣を脈動に変えて、少年の腰の上で無様な潮吹き姿を晒し続ける。
ジュバッ！　プシュッ！　シャアアァァァァッ!!

それは疑似射精と言えるほどの快感だった。美少女のモノとは思えぬ強い牝臭の漂う濃厚な白濁粘液が、数メートルも飛んで床に散っていく。夥しい量で、早くも床には水溜まりができている。

「ああっ！　はひいっ！　なんで……止まらないのおおおっ！」

それがさらなる絶頂を呼び、歌織の顎がガクンと垂直に伸び上がった。

「ひいぃぃっっ！　ゆるヒてェェェッッ!!　とめてぇッ！　もう、いきたくなヒぃぃぃっっ！」

黒髪を背後のクラスメイトの胸に押しつけ、耐え難い快感に美貌も引きつる。酸素を求めるように喘いだ唇の中で、白い牙から精液の雫が糸を引いた。カッと見開かれた魔眼から紅の輝きが失われ、黒い瞳へと戻っていく。

やがて一分以上続いた大量潮吹きが勢いを失って途切れると、歌織の身体から力が抜けて、自らの恥水溜まりの中にバシャンと崩れ落ちた。失神した少女の背中で翼だけが、ヒクヒクと痙攣している。

「俺の奴隷になれ。お前の態度次第では、なるべく大人しい客に売ってやってもいいぜ」

心にもないことを言いながら、屈服を迫る東郷。

「はあ、はあ……」

なんとか身体を起こした歌織だが、弱々しい視線が答えを探すように彷徨う。いや、答えなどわかりきっている。「ハイ」と頷く以外にこの淫獄からは逃れる術はないのだ。しかし、

「……そ……それだけは……いや……」

そこまで追いつめられてなお、歌織は首を横に振った。もう闘う気力などかけらも残っていない。堕ちたほうが楽だとわかっているのに、何故かこの男にだけは屈したくなかった。

「ふん、じゃあ、種付けは続行だな」

その言葉を合図に男子生徒たちが次々に歌織に襲い

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ちょっと大人のライトノベル

あとみっく文庫

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE INFORMATION NEWS

最新刊のお知らせ

全国書店で好評発売中

借金返済のため、お嬢様が工事現場で肉体労働…ストリップまで!?

セレブ界も格差社会だ!!

借金お嬢クリス ②

42兆円踏み倒してやりますわ

小説／筑摩十幸　挿絵／了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス

42兆円を倍増して返してやりますわ

セレブな生活を取り戻すために
魔物にバトルを挑む元・令嬢!

小説／筑摩十幸　挿絵／了藤誠仁

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル　TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!